

# 世界から遊離する意識

——ホワイテッド哲学における意識についての考察——

## Consciousness Released from the Actual World: A Study of Consciousness in Philosophy of Whitehead

佐藤陽祐

### 要 旨

A.N. ホワイトヘッド (1861-1947) の哲学においては、この宇宙のあらゆる事物 (物理的な対象も精神的な活動も含む) や時空のあり方が、「現実的実質」(actual entity) によって説明される。本稿はホワイトヘッドの「有機体の哲学」における意識の本性を明らかにすることを目的とする。そのために、主著『過程と実在』を中心に現実的実質の生成過程における意識の発生機序を確認し、特に意識の発生に不可欠となる「命題」という特異な与件の受容から、直観的判断という意識の発生段階までを考察する。その結果、明らかになるのは、命題のもつ主語-述語形式による現実世界からの抽象や現実世界を限定する働きに加え、否定的命題やコントラストという与件における事実に対する否定としての命題のあり方から、意識は現実世界そのものとは異なった新たな可能性を原初的な意識の発生段階において上らせているということである。したがって、われわれ人間のような高度な有機体は現実世界そのものではなく、現実世界から遊離した現象の世界を生きていることが帰結する。

### キーワード

ホワイトヘッド, 命題, 意識の発生, 判断, 現象

### 1. 経験主体の成立に前提とされない意識

ホワイトヘッドの哲学においては、この宇宙のあらゆる事物 (物理的な対象も精神的な活動も含む) や時空のあり方が、「現実的実質」(actual entity) に

よって説明される。そこでは現実的実質は一つの経験の単位として語られる。各々の現実的実質は一つの「主体」(subject)の成立を目指して生成する。さらに、その生成の過程のうちには複数の相(phases)がある。この諸相において、現実的実質はみずからのパースペクティブにおいて開かれる現実世界のなかのさまざまな「与件」(data)を「感受」(feeling)することによって、その内容を充填させていき、最終的に「満足」(satisfaction)という段階において、現実的実質は一つの主体として成立する。この生成の過程は「現実的な」(actual)ものとして、あるいは現に活動しているものとされる一方で、成立した主体は「実在的な」(real)ものとしてほんの一瞬のあいだこの世界に登場する。しかし、この主体はその成立と同時に、主体を目指して生成する活動性を失うという意味において「消滅する」(perish)。その際に、主体は「客体的不死性」(immortal objectivity)を獲得するといわれる<sup>1)</sup>。すなわち、客体的不死性を獲得した、かつて主体であったものは、次の主体を目指す現実的実質の「客体的与件」(objective data)となる。ホワイトヘッドの名著である『過程と実在』というタイトルが示しているのは、この現実的実質の生成過程から、実在するに至った主体の成立を経て、さらに次の主体を目指す生成過程へのダイナミックな運動を端的に述べたものといえる。

この現実的実質の生成は最終的に一つの主体の成立に結実するのだから、生成の過程において意識(をもった主体)は前提とはされない。ホワイトヘッドは以下のように述べる。

私が採用している原理は、意識が経験を前提としているのであって、経験が意識を前提しているのではない、ということである。意識は、いくつかの感受の主體的形式における特別な要素である。したがって、現実的実質は、その経験のある部分を意識するかもしれないし、意識

しないかもしれない。現実的実質の経験は、その意識を——もし意識があるとして——含む、現実的実質の完結した形式的な構造である。

[PR53]<sup>2)</sup>

現実的実質がある経験主体の成立を目指して生成する過程においては、意識を前提として経験（＝他の与件とのかかわり合い）が生起するのではなく、意識が他の与件とのかかわりを通じて発生してくることが原理として主張される。つまり、意識は他の与件とのかかわりという経験によって生じてくる。上記引用において「主体的形式」(subjective forms)とは、現実的実質がみずからの目指す主体のあり方にしたがって、与件を感受する仕方である。さまざまな与件とのかかわり方にしたがって分類される諸々の感受のなかでも、意識は感受における特別な要素として生成の過程に現れてくることが示唆されている。さらに先取りしていえば、意識は生成の過程の最終的な相において生じる。したがって、現実的実質が意識を含む経験として成立する場合には、その現実的実質は生成過程の最終段階として「完結した形式的構造」をもち、何らかの意識を有する経験主体が成立する。

意識が経験主体の成立過程において前提とされないことは、意識の存在を前提とする伝統的な主体－客体モデルにもとづく経験論とホワイトヘッドの哲学とは異なることを意味する。たとえば、ロックにおける意識の理解についてホワイトヘッドは以下のように述べる。

ロックは意識というものが意識する心における諸観念についての意識であるということをつねに前提としている。しかし彼は、「観念」と「意識」とを決して分離しない。有機体の哲学は、両者を分離し、そうすることによって意識を従属的な形而上学的位置に退ける。[PR139]

ホワイトヘッドによれば、ロックの経験論においては、ある観念を有するという事は、その観念について心が意識しているということがつねに前提とされている。すなわち、外界についての経験が観念として心に入ってくるその際には、つねにそれが意識されることが前提とされている。ロックにおいては観念が心に生じればそれはつねに意識されている。したがって、観念と意識とは決して分離されないと考えられている。他方で、ホワイトヘッドの有機体の哲学では、両者は分離されるという。つまり、何らかの経験対象と意識とは分離され、ある経験対象が必ずしも意識されないことが帰結する。したがって、「現実的実質は、その経験のある部分を意識するかもしれないし、意識しないかもしれない」[PR53]といわれる。さらに、意識が経験の前提や中心となるのではなく、ホワイトヘッドの経験論において、意識は現実的実質の生成にたいして従属的な形而上学的位置に追いやられることになる。

ホワイトヘッドの哲学における意識について簡単にまとめよう。

- 意識は主体を目指す現実的実質の生成過程において前提とされているのではない。
- 意識は生成の過程における最終的な相において生じるものである。
- 意識は経験主体の成立にとって中心的な位置にあるのではなく、現実的実質の生成に対して従属的な位置にある。

以上より、経験主体の成立において意識は前提とされないため、意識が生成過程においてどのように生じてくるのかについて確認する必要がある。意識の成立過程を確認し、そのうえでホワイトヘッドが意識をどのようなものとしてとらえているのかについて考えていきたい。

## 2. ホワイトヘッド哲学における意識の発生機序について

現実的実質の生成過程において、意識がどのように発生するのかを確認していききたい。したがって、生成過程の諸相 (phases) を確認していくことになる<sup>3)</sup>。まずは、意識が生成過程においてどの段階で生じるのかを確認しよう。

現実的実質の生成過程における初期の相は、かつて主体となった諸々の現実的実質からなる現実世界 (= 過去) において、改変されることのない「頑強な事実」(stubborn facts) であるいわば生の与件<sup>ナマ</sup>を感受する「物的感受」(physical feeling) の相である。現実世界にある与件は、いまだ何らの概念的<sup>ナマ</sup>分析を加えられていないため、不定の「コト」や「モノ」たちの集まりだといえる。続く相は、初期相で得られた生の与件<sup>ナマ</sup>のうちに見出される、概念的な対象としての「永遠的客体」(eternal objects) を感受する「概念的感受」(conceptual feeling) の相である。さらに続く第三の相は、「命題的<sup>ナマ</sup>感受」(propositional feeling) の相である。命題的<sup>ナマ</sup>感受の相では、物的感受と概念的<sup>ナマ</sup>感受とが統合される (したがって、命題的<sup>ナマ</sup>感受は「混成的」(hybrid) 感受ともいわれる)。命題的<sup>ナマ</sup>感受においては、物的感受による与件が「論理的<sup>ナマ</sup>主語」(logical subject) となり、概念的<sup>ナマ</sup>感受によって得られた永遠的<sup>ナマ</sup>客体は「述語的<sup>ナマ</sup>パターン」(predicative pattern) として機能し、論理的<sup>ナマ</sup>主語と述語的<sup>ナマ</sup>パターンとが統合された与件が「命題」(proposition) として感受される。この命題的<sup>ナマ</sup>感受が意識の発生にとって不可欠な要素となる。

意識の本性はまだ十全に分析されていない。物的かつ概念的な最初の基本となる感受については言及されてきた。また、肯定-否定コントラストへの最終的な総合 (synthesis) についても言及されてきた。しかし、意識への統合 (integration) の始まりと終わりのあいだには、「命題

的感覚」の生起がある。命題的感覚とは、その客体的与件が命題である感覚である。こうした感覚は、それ自身のうちに意識を含んではいない。しかしすべての形態の意識は、命題的感覚と、物的感覚あるいは概念的感覚、とにかく他の感覚とのさまざまな仕方の統合から生じる。意識はこれらの感覚の主體的形式に属するものである。[PR256]

命題的感覚はそれ自体は意識を含んでいない。しかし、意識は命題的感覚と他の感覚との統合から生じることが述べられている。さらに命題的感覚の相の後には、「より高次の経験の諸相」（『過程と実在』第三部第五章）として、「比較的感覚」（comparative feeling）の相がある。比較的感覚は、以下のように分類できる<sup>4)</sup>。

図1の分類について、ホワイトヘッドによる説明は以下のようなものである。

さて、私たちは二つの単純なタイプの比較的感覚を検討しなくてはならない。一つのタイプは「命題的感覚」と命題的感覚の一部が由来するところの「表示的感覚」との統合から生じてくる。このタイプの感

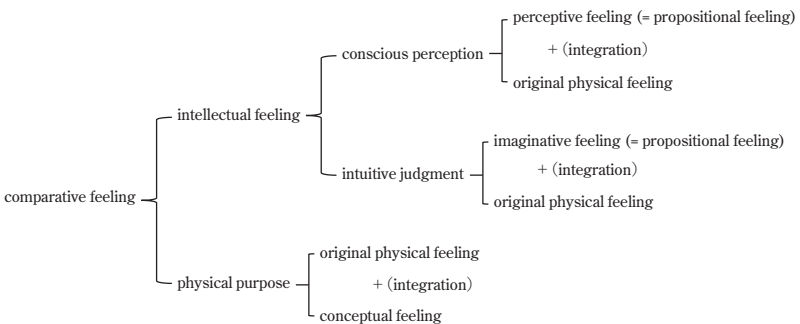


図 1

受は、「知性的感受」と呼ばれるだろう。このタイプの比較的感受は、二種に再分される。一つの種は「意識的知覚」からなり、もう一つの種は「直観的判断」からなっている。直観的判断の主体的形式もまた、意識を含んでいる。こうして、「意識的知覚」と「直観的判断」は、等しく「知性的感受」である。[PR266]

上記引用において「表示的感受」(indicative feeling)とは、命題の論理的主語を感受するものであり、表示的感受は物的感受に由来するため、「命題的感受の一部が由来するところの表示的感受」が由来する物的感受は「おおもとの物的感受」(original physical feeling)といわれる [PR268]。したがって、知性的感受は、命題的感受(=知覚的感受、想像的感受)とこの物的感受との統合から生じる。

図1において、意識の発生機序の説明に必要となるのは、「知性的感受」(intellectual feeling)であり、知性的感受はさらに「意識的知覚」(conscious perception)と「直観的判断」(intuitive judgment)に分類される。ホワイトヘッドによれば、意識はこれらの知性的感受において生じてくるといわれる。知性的感受は、意識的知覚においても直観的判断においても、命題的感受とおもとの物的感受との統合によって生じる。さらに、知性的感受によって得られる与件が「類的コントラスト」(generic contrast)であり、この類的コントラストを感受する際の主体的形式が意識であるといわれる [PR267]。以上より、意識は比較的感受のなかでも、知性的感受において生じることがわかる。

生成過程の諸相を経て、意識の発生へと至る経路を総覧的に確認しよう。見取り図として、さらに図2を示す。図2において、( )内は各々の感受の与件を示している。

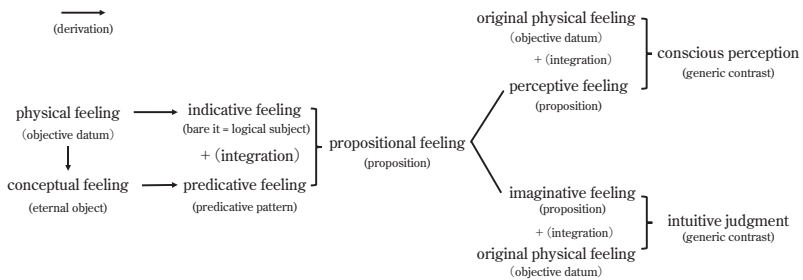


図 2

物的感受から概念的感受が派生する。また、物的感受から「指示的感受」(indicative feeling) が派生し、概念的感受から「述語的感受」(predicative feeling) が派生する。さらに、指示的感受と述語的感受が統合されることによって、命題的感受が派生する。命題的感受は二種類あり、それぞれ、知覚的感受と想像的感受到に分類される。両者の命題的感受がさらに、「おおもとの物的感受」と統合されることにより、意識的知覚と直観的判断が派生し、ここにおいてホワイトヘッドは意識の発生を認める。

生成過程の諸相における意識の発生経路について形式的には確認した。しかし、その内実がどのようなものかがまだ明らかにされていない。意識の発生の内実がどのようなものかを知るためには、ホワイトヘッドの哲学において、他の哲学には見られない異様な概念ともいえる命題を見なくてはならない。

### 3. 生成過程における特異な与件としての命題

ホワイトヘッドの哲学において命題とは、物的感受による与件が「論理的主語」(logical subject) となり、概念的感受によって得られた永遠的客体は「述語的パターン」(predicative pattern) となって、両者が統合された主語－述語構造を有する与件である。この命題がどのような与件なのか見ていく。



物的感受から派生する指示的感受において、物的感受によって得られた生<sup>ナマ</sup>の与件は、端的な指示詞としての「たんなるそれ」(bare it) [PR258] に還元される。というのも、不定の現実世界のうちにある何かを何かとして限定するためには、その何かがまず指定されなければならないからである。たとえば、目の前のテーブルの上にある雑多なもの(コップや皿、鉛筆、ハサミ、ノート、本やラジオなど)が置かれている。ホワイトヘッドの体系に従えば、まず、われわれの認識においては、最初からあるものがコップや皿として現れてくるのではなく、それらが不特定の何らかの「モノ」<sup>5)</sup>としてある。モノから何かを特定して示すときには、不特定の「モノ」ではなく、「あれ」とか「それ」という形でそれらのモノの集まりのなかからあるものをピックアップしなければ、その何かを特定することはできない。これと同様に、現実世界の不定のモノたちのなかから何かを特定するためには、まずはその何か「それ」として指示されなければならない。したがって、どのような特徴や限定の可能性をもつものであれ、ある不定のモノが指示詞としての「それ」に還元される。そして、指示詞に還元された与件は、「論理的主語」と呼ばれる。

つづいて、「それ」である論理的<sup>ナマ</sup>主語が何であるかが限定されなければならない。不特定のモノのなかから特定された「あれ」や「それ」が何であるのかを示さなければならないということである。つまり、それは「コップ」や「皿」や「鉛筆」や「ハサミ」であるかもしれない。そうした特徴を示すことによって、「あれ」や「それ」を「あれはコップである」や「それは鉛筆である」というように限定することができる。つまり、「あれ」や「それ」を述語づけることによって、それらが何であるかを限定する。同じように、論理的<sup>ナマ</sup>主語である「それ」について、述語づけがなされる。この論理的<sup>ナマ</sup>主語と、先に不定のモノたちに見出された質や形式(永遠的<sup>ナマ</sup>客体)が「述語的パターン」として統合される。その結果、「それはバラである」の

ような命題ができる。こうして、「それ」として指示されたモノと、「それ」にたいして述語のように機能するようになった永遠的客体和が統合された与件が命題である。そして、この命題は、その生成の過程にとって現実世界がどのように経験されるかに関して、「可能的」(potential)なものとしてある。

論理的主語と述語の、結合体と永遠的客体の共在性 (togetherness) は、可能的である。それは、すでに実現されたものとして与えられているのではなく、合生しつつある主体のうちで実現可能なものとして提示された共在性である。その永遠的客体が結合体のうちで実際に実現されているか否かは、真なる命題を偽なる命題から区別する付加的な性質ではあるが、そのような命題の本質的性格ではない。[Kraus 95]

上記引用における「結合体」(nexus)とは相互に感受しあう現実的実質の一定の集合体であり、生の与件としてのモノであると解されたい。論理的主語と述語的パターン、すなわちモノと永遠的客体和が共在しているというのは、二つの与件が統合されて命題が成立していることである。上記の引用が強調するように、命題が提示する内容は、すでに実現された事実ではないことに留意したい。たとえば、「それはバラである」という内容をもつ命題が形成されるとする。この命題が示す内容は、バラのイメージ経験における内容であるかもしれないし、現在の知覚経験の内容かもしれないし、過去に見たバラの記憶の内容であるかもしれない。どのような種類の経験においてこの命題が実現されるかは、生成過程のより後続の相における「判断」(judgment)にゆだねられる。したがって、命題そのものは、いかなる種類の経験であれ、現実的実質がどのような経験の内容をもちうるかを「提示する」(propose)あくまで可能性でしかない。

たしかに論理的主語に還元される以前の生の与件は、不定の事実である。しかし、この結合体のうちに「バラ」という永遠の客体が先に見出され、命題の述語的パターンとして機能しているとしても、「それはバラである」というこの命題そのものは確定した事実を表現しているのではない。命題が表現する内容は、あくまで現実的実質が経験しうる可能性の一つでしかない。したがって、命題の真偽はこの命題を感受する相では問われない。命題が提示する内容について、生成過程の後続の相において事実である結合体と命題とが対照化されることによって命題の真偽が決定される。

また命題は、生の事実である結合体から派生する論理的な主語と永遠の客体が担う述語的パターンとの「混成物」(hybrid) [PRI85] であるといわれる。たとえば、赤いバラを見ているとき、それがもつ特定の「形状」や「赤さ」を知覚し、「バラ」や「植物」として認識しうることは、「永遠の客体」を経験していることになるだろう。しかし、それを「バラ」として見ることや「赤さ」や「形」は、「それ」という事実との関連において独自のものとなる。つまり、永遠の客体は、他のものではなく「それ」との唯一無二の関係性において、述語的パターンとして「このバラの赤さ」や「あの黒板の三角形の図」として現実化される。こうした命題の混成的構成が、さまざまな質や形式を備えた各々の事物に固有のあり方をもたらす。とはいえ、命題は、生成過程においてすでに実現されたものとしてではなく、「それ」としてのみ示される事実（論理的な主語）と述語的パターン（永遠の客体）との可能的な結びつきを提示する (propose)。したがって、極端な場合には、その生成過程においてかかわり合う現実世界にはないような論理的な主語と述語的パターンとの結びつきが生じる場合もあるだろう。この命題は、論理的な主語とそれまでになかった述語的パターン<sup>6)</sup>の結びつきを示すという意味において、経験に「新しさ」(novelty) をもたらす。そして、この新しさは命題という混成的なあり方でのみ可能なものとして現実的実質に提

示される。

この命題の成立によって、渾然とした現実世界は、永遠的客体のもたらず性質によって限定され、分節化されたものとして姿を現す。さらには論理的主語にたいして統合される述語的パターンによっては、その論理的主語をなす元の結合体には含まれなかったような性質を備えた命題が成立する。こうした命題の成立が何を意味するかといえば、ホワイトヘッドは命題が現実の「半影」(penumbra) [PR185] を提示しようという。半影とは何だろうか。

後悔や悔恨とは、自身が行ってしまったことを後になって悔やむことである。われわれが後悔するのは、行ってしまったことがいかにしても変えることのできない事実であるからだ。さらに後悔をする際には、事実に対して「もしこうしていたならば」あるいは「(事実が) もしそうではなかったならば」という仮定をしている。事実に対して仮定される「もしこうしていたならば」あるいは「もしそうでなかったならば」という内容は、もはや変えようのない事実があったうえで仮定される。したがって、自身が行ってしまったことが現に現実世界にある変えようのない事実ならば、これらの仮定の内容はその事実の「辺縁」にある半影といえるだろう。注目すべきは、「もしそうでなかったならば」という事実の否定も「半影」の中心にあるということである。

事実の否定についていえば、たとえば、命題は「カエサルはルビコン河を渡らなかった」とか「ナポレオンはワーテルローの戦いで勝利した<sup>7)</sup>」といった形式で提示されるかもしれない。もちろん、これらの命題は事実としては偽である。カエサルがルビコン河を渡河したことでローマの内戦が勃発し、ナポレオンはワーテルローの戦いで敗北を喫しセントヘレナへ流されたのであった。われわれにとっても論理学者にとっても、以上のような偽なる命題は、それが事実とは異なり、偽であるという意義を持つ以外

に、それらから何か有益なものを生み出すことのない、価値のないものと思われるかもしれない。しかし、ホワイトヘッドは偽なる命題について以下のようにいう。

……たいていの論理学者たちは、命題を判断の単なる付属物と見なし  
ている。その結果、偽なる命題は塵芥の山に捨て去られ、無視されて  
きた。しかし、実在の世界では、命題が真であるということよりも、  
興味深いということのほうがもっと重要である。真であることが重要  
なのは、それが興味深さを増加する点にあるのである。[PR 259]

命題は現実にあった事実と関連をもちつつも、ありえたかもしれないも  
のと統一され意味づけられることで、新しい価値を実現する。われわれの  
世界には、何ものによっても改変不能な過去の事実だけがあるのではない。  
「ナポレオンはワーテルローの戦いで敗北した」という事実の否定を考える  
ことができるし、「ワーテルローの戦いと関連によって構成された半影が  
ある」[PR185]のだ。

眠る前にその日の出来事を回想することがある。われわれは出来事にたい  
して「ああすればよかった」だとか「こうすべきであった」と反省や後悔  
をする。意識においてわれわれは、現にあった出来事とは別に「すれば  
よかったこと」、「すべきであったこと」を出来事にたいしてとらえている。  
出来事にもとづきながらも「すればよかったこと」、「すべきであったこと」  
は現実とは異なる新たな可能性である。こうした経験をホワイトヘッドは  
事実の半影と呼び、われわれの経験を形作る重要な要素とみなす [PR187]。

こうして、ある確定した事実、それよりももっと多くの可能性が排除  
されたことを物語る。たとえば、さいころを振って三の目が出たら、一で  
あったり、二であったり、四でも五でも六でもあった可能性があったこと

になる。したがって、ある事実には必ずその半影の中心として否定（出たさいころの目が三ではないということ）があり、この事実の辺縁に半影（さいころの目が一、二、四、五、六であったかもしれないということ）を伴っている。だから、事実の裏にある果てしない選択肢のレパトリーには、選ばれる可能性があったのに選択されなかったものすべてがつかまっている。主体を目指す生成過程は、命題が提示するこれらの半影を経験要素として感受する。

そしてホワイトヘッドは、この半影を提示する命題に生成過程における可能態としての存在身分を認める。ここから興味深い帰結が引き出される。すなわち、一つの経験の達成を目指す生成過程は、確定されなかった無数の可能性のレパトリーに支えられている。現にある事実にはすべてその否定が考えられる。ホワイトヘッドはそれらの事実の否定であり、事実の辺縁をなす半影が生成過程の目指す経験の達成に寄与しうることを命題という与件をもって説明する。つまり、こうした事実の否定や無数の半影的要素がどのような価値を生成過程にもたらすかに命題概念の重要性がある。したがって、ホワイトヘッドは、命題がそこからさらなる経験を引き出す「感受のための誘因」(a lure for feeling) [PR184-185]であることを強調する。命題は「単なる所与に縛りつけられない、感受が生まれるための源泉をなしている」[PR186]のである。それゆえ、命題はその真偽よりも、それが「興味深い」かどうか生成過程にとっては重要なのであり、そこからどのような経験がさらに引き出されうかが問題になる。

たとえば、量子力学における多世界解釈は、世界はこの一つだけではなく、無数の分岐する世界がありうるという考え方を示唆する。この考えから「この現実とは別に、もう一つの現実が存在する」という命題ができるとする。SF作家たちは、この命題の真偽については問わない。彼らはこの命題を「興味深い」ものとして受け取り、この興味にもとづいて物語を紡

ぐ。すなわち、この現実世界とはまた別の世界の存在を前提として物語が作られる。一見すると荒唐無稽な反実仮想的観念のように見える命題でも、そこからさらなる経験が引き出されうるという点に命題の意義がある。

このように現にそうであった揺るがしがたい過去の事実をもとに、いかにして命題の提示内容がその所与にしばられない自由を発揮するのか。たしかに論理的主語が派生してくる過去の与件である現実世界は、生成過程にとって改変不能な「頑強な事実」(a stubborn fact) である。しかしその一方で、生成過程において心的な働きの高まることによって論理的主語と統合される述語的パターンは「新しさの閃き」(the flash of novelty) [PR184] として、頑強な事実にたいして新たな性質や秩序を与えうる。したがって、述語的パターンがそうであったかもしれない可能的要素として論理的主語と結びつけられることによって、命題は単なる事実の反復を提示するものではなくなる。つまり、命題はそれまでにはなかった世界の可能性を生成過程に提示する。このような命題のあり方からすれば、当然、偽なる命題は、その命題を受容する生成過程の現実世界に合致しない (non-conformal) ことになる。偽なる命題は、論理学者にとっては、単なる誤りとして一顧だにされない。しかし、ホワイトヘッドは、偽なる命題を世界の創造的前進の道具とみなすのである。

命題が単に判断のための素材であるという考えは、宇宙における命題の役割についてのいかなる理解にとっても致命的である。かの純粹に論理的な局面にあっては、非順応的命題は誤りにすぎないし、それゆえに無益であるよりも一層始末が悪いのである。しかし、その命題の第一の役割は、世界がそれに沿って新しさへと進んで行く道を拓くことである。誤謬は、われわれが進歩のために支払う代償なのである。

[PR187]

ここに見られるように、ホワイトヘッドは命題を単なる判断の要素としてみなさない。これまで見てきたように、命題は現実世界のあり方の可能性を提示するのである。命題の示す内容の真偽は生成過程の後続相において問われることになる。だから、命題そのものは、それ自体の真偽について何も語らない [PR257]。命題は現実世界の新たな把握の仕方の可能性を示しているだけであり、みずからの真理に関しては未決定性が残る [PR258]。そして、この未決定性のうちにこそ、プロセスが新しさを受容する余地がある。すなわち、結果として偽となる命題であっても無益なものとして捨て去らないということである。

たとえば「地球外生命体が存在する」という命題を考えてみる。現状、この命題について真偽は確定していない。この命題は、現実世界の可能性でしかない。この命題は、いつか偽であることが明らかになるかもしれない。しかし、われわれはこの命題の真偽よりもその興味深さにもとづいて行動する。すなわち、たった一つの水素原子にすら出合わない暗闇の宇宙に惑星探査機を飛ばし、ポイジャーのゴールデンレコードのような人類からのメッセージを送る。「地球外生命体が存在する」という命題から、われわれは宇宙の生物探査という新しい道を拓いてきた。たとえこの命題が誤りだとしても、この誤謬は宇宙の生物探査というわれわれの進歩のための代償なのである。このように、命題は単なる判断のための要素ではない。命題の役割は、その命題をもつ存在がその命題からさらなる行動へと進んで行くための誘因 (lure) である。

#### 4. 抽象と否定

以上確認してきたように、ホワイトヘッドの哲学における命題とは、主語－述語形式をもち、事実の半影を提示し、経験に新しさをもたらす特異な与件であるといえる。こうした命題を感受することには二つの意義があ



ると考えられる。第一に、命題は現実世界から主語－述語形式を抽象した成果であり、命題の感受によって主体を目指す生成過程は、この抽象によって現実世界からいわば引き離されるという点である。

有機体の哲学の以降の議論の展開において、命題の主語－述語形式は、主体的形式へのその適用を除けば、高度な抽象に関係しているという信念に律せられている。[PR30]

有機体の哲学において、主語－述語命題は、高度な抽象を表現するものと見なされている。[PR138]

不定のモノとしての結合体から派生する論理的主語と、「それ」を限定する永遠的客体である述語的パターンとの統合から派生する命題は、モノについて主語－述語という形式をもって生成過程において提示される。つまり、命題は不定の現実世界から主語－述語という形式を引き出しているといえる。したがって、生成過程においては現実世界のある事物について、それが主語であり、主語がなんらかの性質を有することを形容し、当該の主語を限定する述語と結びついていることは、前提とされていない。というのも、命題という与件を感受することによって初めて、主語－述語という構造を有する経験要素が生成過程に提示されるからである。こうした発想は、ホワイトヘッドがアリストテレス以来の実体（－属性）概念に批判的である<sup>8)</sup>点に由来する。その結果、主語－述語形式は現実世界からの高度な抽象であり、意識や経験についての形而上学において前提されるものではないと考えられている。したがって、命題は現実世界にある<sup>ナマ</sup>生の与件そのものではなく、主体を目指す生成過程において形成された特殊な与件であり、現実世界から抽象され、いわば引き離されたあり方をしているとい

える。さらに、こうした形式を有する命題は、<sup>ナマ</sup>生の与件を解釈するための理論として機能するといわれる。

命題というのは、現実態に関する観念であり、事物についての示唆であり、理論であり仮定である。それを経験のうちに抱懐することは、多くの目的に役立つ。命題は、〈現象〉の極端な事例である。というのは、論理的主語である現実態は、述語を例示するという装いにおいて解されているのだから。命題を無意識的に抱懐することは、経験の原初相の〈实在〉から最終相の〈現象〉への移行におけるある段階である。[AI244]

不定のモノを「それ」として端的に示す論理的な主語と、「それ」を限定する述語的パターンとの統合からなる命題は、ある現実態（=<sup>ナマ</sup>生の与件）に関する見方、<sup>ナマ</sup>生の与件についての主語－述語形式による表現を、今、生成しつつある当の現実的実質に提示する。命題は、<sup>ナマ</sup>生の与件をいかにとらえるか、またどのようなもの「として」ありうるのかという可能性の一つとして感受される。したがって、命題は、<sup>ナマ</sup>生の与件をそのようなもの「として」とらえる一つの可能性、一つの見方の表現という意味で、<sup>ナマ</sup>生の与件を解するための「理論であり仮定である」といわれるのである。さらに、命題は事実として「なにものでもない」不定の<sup>ナマ</sup>生の与件にもとづきつつ、その可能的な表現の一部として生成過程に現れるという意味で、意識以前に、ある<sup>ナマ</sup>生の与件について現れるもっとも先鋭化された現象であるといわれる。すなわち、命題の感受によって、初めて「なにものでもない」<sup>ナマ</sup>生の与件にたいして「それはコップである」とするような主語－述語構造を有する一つの見方が可能態として現れてくるのである。

以上のような生成過程において命題を感受する経験の構造から、現実的

実質は生成過程における高次の諸相において、「何を経験するか」と「それをどのように経験するか」とを区別しているといえる。というのも、現実的実質が感受し経験するものは生の与件であるものの、命題の感受によって生の与件を解釈するための可能性が現れ、命題によって生の与件がいかに経験されうるのかを提示するからだ。さらに、生の与件と命題とが統合され、コントラストを成す知性的感受において意識が生じる。つまり、命題（＝理論）によって生の与件が解釈されたもの「として」の意識的な経験を有する主体が生成過程の最終段階において実現されることになる。

以上より、生の与件の在りようについて、主語－述語形式によって表現し、生成過程に生の与件のありうる可能性を提示する命題は、生の与件そのものとは異質な与件であり、現実世界における生の与件について、現実世界から引き離された高度な抽象を表現しているといえる。

命題を感受することの第二の意義は、経験に「否定」(negation)を導入することである。命題がもつ否定の意味は二重化されている。まず、否定的命題として、命題そのものが事実に対して否定的な内容を有するということである。

現実世界には否定というものはない。われわれの生きるこの実在の世界には、否定そのものは登場しない。というのも、どのような事物であれ、事物が現に存在している事実があって、初めてその否定が考えられるからだ。何かを否定するということは、否定の対象としてのその何かがつねにすでに前提とされなければ、否定することはできない。したがって、現実世界はあるものがある世界であり、そこに否定それ自体は現れない。しかし、すでに見たように命題は、事実の否定を表しうるものであり、事実の辺縁をなす半影を提示する。つまり、命題の感受によって初めて、生成過程は否定という可能態を得ることになる。それゆえ、命題は否定が現れる契機といえる。さらに現実世界には現れない否定は、命題をもとに派

生ずる意識に現れる。ホワイトヘッドによれば、否定こそが意識の本質として解される。

意識的知覚の一般的事例は、否定的知覚、すなわち「この石を灰色ではないものとして知覚すること」である。そのとき、「灰色」は、残された選択肢を例示しながら、概念的の新しさの十全な性格において、進入している (has ingress)。 「この石を灰色として知覚する」肯定的な事例においては、灰色はその可能的な新しさという性格において進入しているが、事実上は、盲目的に感受された与件の灰色を強調するその順応性によって進入している。意識は、否定の感受である。すなわち「灰色としてのその石」の知覚においては、否定的感受は、あからさまな胚芽の状態にある。「灰色ではないものとしてのその石」の知覚において、否定的感受は十分に成長している。こうして、否定的知覚は意識の勝利である。最終的には、否定的知覚は、自由な想像力という頂点にまで高まる。そこでは、概念的の新しさは、それらが予見として例証されていない宇宙の隅々にまで及ぶのである。[PR161]

この石が実際に灰色であり、この石を灰色であると知覚する場合には、「それは石であり、かつ灰色である」という命題が形成されるだろう。過去としての<sup>ナマ</sup>生の与件のうちにある「石」や「灰色」という永遠的客体は概念的感受によって見出され、この知覚経験に寄与する新しい命題の述語的パターンとして意識的知覚に介入している。しかし、実際には、<sup>ナマ</sup>生の与件のうちに見出された、過去にあった要素である永遠的客体を述語的パターンとして、そのまま順応という関係性において、いわば盲目的に生成過程が受容しているにすぎない。この石を灰色として知覚する場合には、「それは灰色ではない」という否定的命題はこの知覚経験に寄与することはない。

この否定的命題は生の与件<sup>ナマ</sup>を解釈するための「理論」として用いられず、その結果意識に上ることはなく、胚芽の状態にあるといえるだろう。

一方で、この石が実際には灰色以外の色をしているとして（赤でも青でも黒でもよい）、「それは赤である」、「それは青である」というような命題を形成するのではなく、「それは灰色ではない」という否定的命題を形成する場合がある。この場合、実際の色にたいしてこの命題の述語的パターンにおいて機能している灰色は、他の選択肢としての永遠の客体との関係（赤や青や黒）を例示しながら、生の与件<sup>ナマ</sup>のうちにあったこれらの他の選択肢とは異なり、この与件<sup>ナマ</sup>のうちになかったという意味で、まったく新しい要素としてこの知覚経験に介入している。こうした述語的パターンをもつ否定的命題が、「理論」として用いられ生の与件<sup>ナマ</sup>について解釈をした場合、「灰色ではないものとしての知覚」が成立し、ここにおいて「それは灰色ではない」という否定が意識としてこの世界に登場する。

否定は、われわれの現実世界にそれ自体として事物のように存在しない。この現実世界にあるのは事実だけである。本や鉛筆や富士山といった外界にある事物、走ること、笑うことといったさまざまな活動、怒りや喜びといった感情、素粒子や電子といった物理的概念などに至るまで現にあるものだけが存在する。「～でない」という否定は、現実世界には存在しない。しかし、これらの事物にたいするあらゆる否定は、すべて意識において生じる。本ではない、走らない、悲しみが無い、素粒子ではない……というように、すべての否定は、現実世界にある事物と関係するとともに、命題によって提示され、すべて意識として現れる。したがって、否定的知覚が意識の勝利だといわれるのである。すなわち、否定は意識においてしか現れえない。そして、この否定は、「事実はあるが、もし～ではないならば」という想像にまで到達するといわれるのである。こうして、ホワイトヘッドは意識の本質を、意識において否定が現れうることに見出すの

である。

命題がもつ否定の意味は二重化されているという点について、命題がもつ第二の否定の意味は、事実と事実では「ない」命題とのコントラストをなすことである。この点について確認するためには、「コントラスト」(contrasts)という概念を確認する必要がある。

意識の発生は、生成過程における構造としては、知性的感受において生じることを確認し、知性的感受によって得られる与件が「類的コントラスト」(generic contrast)であることをすでに見た。再度、生成過程の図式を確認しよう。図3において、( )内は各々の感受の与件を示している。

形式的には命題的感受とおおもとの物的感受の統合の結果、知性的感受では類的コントラストが与件として感受される。与件の構成についていえば、命題と客体的与件である生の与件が統合されることによって、類的コントラストが形成される。

命題は頑強な事実である現実世界から派生し、現実世界の事物についてそのあり方の可能性を提示する。つまり、主語-述語という形式を有することによって、「それ」について何らかの述語づけがなされる構造を、現実世界から切り分け、分節化し、抽象する。一つの経験主体の成立を目指す生成過程は、すでに決着を見た過去の頑強な現実世界の受容から始まる。この現実世界は、単に経験主体にとっての外界のみについていうのではない。現実世界にはみずからの身体そのものや、以前の心的状態などの情緒的なものも含まれるからだ。そして、命題によって、現実世界の分節化の可能性(世界のあり方の可能性を分節化するといってもよい)が提示される。

繰り返すが、現実世界にはわれわれの過去の身体や心的状態も含まれる。したがって、命題による世界のあり方の分節化には、われわれの五感による知覚経験、あるいは痛みや疲労といった身体内部の感覚経験、感情の経験、非実在的な対象についてのイメージ経験、記憶の想起、思考内容など

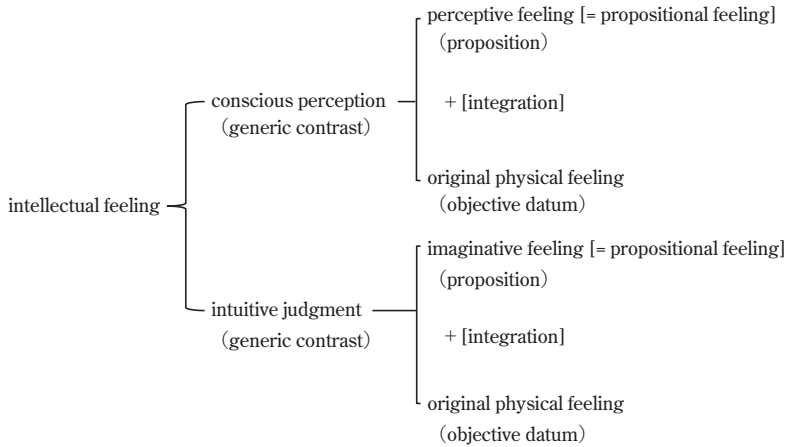


図 3

も含まれる。このような意味で、命題はすべて現実世界のあり方を表すものだといえる。こうした内容をもつ命題がどのように扱われるかが、生成過程におけるより高次の諸相で決定される。提示された命題が経験主体を目指す現実的実質にとってどのような意義をもつものかを決定するために、命題は、命題（の論理的主語）がそこから派生してくる頑強な事実としての結合体である生の与件と「コントラスト化」(contrast) されることになる。このコントラストが、「類的コントラスト」(generic contrast) [PR266] と呼ばれる。

このコントラストは、「肯定－否定のコントラスト」と呼ばれていたものである。それは、物的感受における客体化された事実の肯定と、命題の感受におけるこうした肯定の否定であるところの、単なる可能性との間の、コントラストである。またそれは、この現実世界における独特な諸事例に関する「実のところ」と「あるかもしれない」との間のコントラストである。このコントラストの感受の主體的形式が、意

識なのである。このように、経験において、意識は、知性的感受のゆえに、またこれらの感受の多様性と強度に比例して、生じるのである。

[PR267]

物的感受によって経験された現実世界は、何ものによっても改変されることのない過去の頑強な事実であり、それはまた何らの概念的分析を加えられていない、いわば生の与件であった。物的感受によって、過去は肯定された事実として生成過程に受容される。一方で、生の与件から派生する命題は、それらの事実にたいしてあくまで現実世界の「現れ」となりうる可能性でしかない。すなわち、命題はあくまで生の与件の在りようを解するための可能性でしかなく、事実ではない。したがって、コントラストにおいて、可能性としての命題はこの意味で事実という肯定にたいする否定といわれている。以上のような生の与件と命題の二つの要素が、「肯定－否定のコントラスト」として統一される。さらに、ホワイトヘッドは二つの要素がコントラストとして統一されることに、現実的実質における意識の発生を見るのである。

## 5. 現実世界から遊離する意識

生成過程において類的コントラストを感受することは、すなわち、生の与件と命題とを「つき合わせる」(confront) [PR269] ことによって、生の与件と命題との相違を明示することである。この相違が、目指される経験主体にとっての現象を構成するといわれる。

物的極の原初相の客体的内容と、物的極と心的極とが統合された後での、最終相の客体的内容との間の相違が、その契機にとって「現象」を構成している。[AI 211]



この引用において、「物的極の原初相の客体的内容」とは物的感受の与件である生<sup>ナマ</sup>の与件であり、物的極と心的極との統合とは物的感受と概念的感受の統合であり、命題の形成を示唆している。さらに、「最終相の客体的内容」は類的コントラストであり、類的コントラストにおいて生<sup>ナマ</sup>の与件と命題との相違が判断されるため、類的コントラストが経験主体にとっての現象を構成すると解することができる。たとえば、本来的には石である生<sup>ナマ</sup>の与件を「それは武器である」という形式で提示する命題は、プロセスの最終相においてあらためてこの生<sup>ナマ</sup>の与件（石という性質を有する）とのコントラストにおかれることになる。石という性質をもちうる生<sup>ナマ</sup>の与件と武器という述語的パターンを有するこの命題とは相違がある。命題という事実に対する現れの可能性と事実そのものがコントラスト化された与件が、類的コントラストであり、経験主体にとっての現象となる。

意識的現象には、想像や想起もある。想像や想起は、現にここに存在しないことやものを、今ここにおいて意識することである。意識的な想像や想起については、「想像的感受」(imaginative feeling)と「直観的判断」(intuitive judgment)によって説明することができる。まずは、命題的感受の一種である想像的感受について確認しよう。

想像的感受の客体的与件である命題は、転換(reversions)を伴うか否かによらず、論理的主語を提供する結合体とはいくつかの点で異なる結合体から派生する述語を有している。したがって、この命題はその論理的主語に関する想像上の観念として感受されている。[PR263]

知覚的感受の場合には、論理的主語をなす生<sup>ナマ</sup>の与件(=結合体)と述語的パターンが派生してくる生<sup>ナマ</sup>の与件は同一のものである。しかし、想像的感受においては、論理的主語をなす生<sup>ナマ</sup>の与件と、述語的パターンが派生して

くる生の与件は異なる<sup>9)</sup>。つまり、現実世界にある事実について、「それ」  
として示される論理的な主語とは異なる生の与件から述語的パターンが引き  
出されており、想像的感受における論理的な主語と述語的パターンの統合に  
おいては、論理的な主語をなす生の与件には見出しえなかった述語的パター  
ンが統合される。したがって、論理的な主語をなす生の与件である事実のう  
ちにはない述語的パターンが統合されることは、もとの事実にはない性質  
が述語として論理的な主語に対して機能するため、論理的な主語をなす事実の  
うちには存在しない述語的パターンによる性質を有する命題は、事実に対  
して想像的であり、この命題の感受は想像上の観念として受容される。

たとえば、先に挙げた例を再び用いれば、石を武器としてとらえるよう  
な意識の発生に際して感受されている命題は、石という性質を有する生の  
与件から論理的な主語が派生し、この生の与件（石という性質を有する）とは  
異なる、「武器」という性質を有する生の与件から「武器」という永遠的客  
体を感じ、述語的パターンを得ることによって、論理的な主語に対して「そ  
れは武器である」という命題が形成される。この命題は、現実世界におい  
ては石であるような与件について、武器というあり方を提示し、石という  
現実そのものに対する想像的な見方を提示しているといえる。

直観的判断は、表示的感受に含まれる結合体と、想像的感受に含まれ  
る命題との類的コントラストによって構成された与件を伴う比較的感  
受である。[PR271]

さらに、直観的判断は想像的感受のもたらす命題と、表示的感受が派生  
してくるところの物的感受がとらえる生の与件（＝結合体）との統合によっ  
て、類的コントラストを得る感受である。この類的コントラストにおいて、  
想像的感受によってもたらされた命題と生の与件との「つき合わせ」

(confrontation) [PR209] によって、命題が提示する事実にたいする想像的内容がどのようにとらえられるかが判断されることになる。

直観的判断の主体的形式を、命題における信念あるいは不信を必ず含むものとして説明することは、大きな間違いである。三つの事例が起こる。直観的判断の与件である類的コントラストは、命題の述語を、客体化された結合体に例証されたものとして示すかもしれない。この場合、主体的形式は特定の信念を含むだろう。第二に、述語は客体化された結合体に例証されている永遠的客体と両立しないものとして示されるかもしれない。この場合、主体的形式は特定の不信を含むだろう。しかし、実際にはもっと普通の第三の事例がある。述語は、客体的与件に例証されている永遠的客体と、全面的にあるいは部分的に、無関係なものとして示されるかもしれない。この場合、主体的形式は信念も不信も示す必要がない。それはこれらの決断の一方か他方を示すかもしれないが、そうである必要はない。この第三の事例は、「停止された判断」の事例と呼ばれるだろう。こうして、直観的判断は、信念か、不信か、あるいは停止された判断である。[PR272]

直観的判断においては類的コントラストが感受され、提示された命題と客体化された結合体(=生の与件)との相違について判断がくだされる。命題の述語的パターンが生ナマの与件において例証されている永遠的客体と同一の場合には、命題は肯定され、類的コントラストを感受する主体的形式は示された命題について信念を含む。他方で、命題の述語的パターンが生ナマの与件において例証されている永遠的客体と相違し、両立しない場合には、命題は否定され、類的コントラストを感受する主体的形式は示された命題について不信を含む。さらに、命題の述語的パターンが生ナマの与件において

例証されている永遠的客体とまったく無関係なものとして示される場合には、命題の判断は停止される。

以上のように、直観的判断においては、生<sup>ナマ</sup>の与件に例証される永遠的客体と命題の述語的パターンとの整合、不整合が判断される。特に、永遠的客体と述語的パターンとが両立しない、ないしはそもそも関係がないような場合は、事実を解釈するために提示された命題は事実<sup>ナマ</sup>にたいして否定的な命題となる。そして、この否定を類的コントラストにおいてとらえることに意識の本質がある。

意識の勝利は、否定的な直観的判断とともにやってくる。この場合、そうであるかもしれず、（論者注：実際に）そうではないものの意識的感受がある。この感受が直接にかかわるのは、その主体によって享受される特定の消極的抱握である。それは不在の感受であり、そしてそれはこうした不在を現実<sup>ナマ</sup>に存在しているものが明確に排除されることによって生み出されるものとして感じる。こうして、意識の独特な特徴である否定の明確性は、ここで最大限のものとなるのである。

[PR273-274]

たとえば、われわれは白いカラスについて想像することができる。現実世界のどこにおいても、一般的に黒いカラスが、白さという特徴と結びつくことはない。しかし、想像的感受による命題によって、「それはカラスでありかつ白い」という内容が提示され、この命題が現実世界に現にある黒いカラスの存在という生<sup>ナマ</sup>の与件と照合される類的コントラストとして直観的判断において感受されるならば、「それはカラスでありかつ白い」という命題が提示する可能性は、「そうであるかもしれず、（実際には）そうではないもの」という否定の意識となる。この類的コントラストの感受は、現に

存在する黒いカラスにたいして、白いカラスの不在を感受することである。この白いカラスは、現に存在する黒いカラスが排除されることによって、命題によって示された白いカラスの不在という仕方でも生み出され、意識において不在という形で白いカラスが現象するといえる。したがって、事実に対する否定を明確にとらえることに意識の勝利、すなわち意識の本質があるとされるのである。

以上のような生成過程における想像的感受と直観的判断による意識の発生構造やその内実を見るに、ホワイトヘッドに従えば、意識現象は、現実世界から高度に抽象化かつ限定化され、さらに否定の働きによって、生の与件としての現実世界そのものから意識の発生段階においていわば遊離していると考えられる。すでに見たように、命題を感受する段階において、生成過程は現実世界を主語－述語形式によってとらえる抽象を行い、「それ」について特定の述語的パターンによって限定された命題という経験の要素を受容する。さらに、否定的命題ならびに、事実にたいする「否定」の意味を有する類的コントラストにおける命題のあり方によって、現実世界について事実とは異なるあり方が示され、現にあるものとは異なった内容が現象として意識化されうる。生成過程における高次の諸相を経ることによって、意識は現実世界そのものとは異なった新たな可能性を原初的な意識の発生段階において上らせている。したがって、意識の本質は抽象と否定によって現実世界そのものから遊離し、現象の世界を現実的実質のペースペクティブにもとづいて展開することであり、われわれ人間のような高度な有機体は現実世界そのものではなく、現実世界から遊離した現象の世界を生きていることが帰結する。

## 注

- 1) ホワイトヘッドは以下のように説明する。

現実的実質は主体的には「絶えず滅する」が、客体的には不死的である。現実態は主体的直接性を喪失する一方で、消滅する際に、客体性を獲得する。[PR29]
- 2) 引用文献については、[記号 頁数] のように示す。引用文中の傍点は原文でイタリック表記された箇所を、〈 〉は原文大文字で表記された箇所を示す。

PR: Whitehead, A.N., *Process and Reality; An Essay in Cosmology*, Corrected Edition, Ed. by Griffin David Ray and Sherburne Donald W., The Free Press, 1978. (『過程と実在 (上)』山本誠作訳, 松籟社, 1984年, 『過程と実在 (下)』山本誠作訳, 松籟社, 1985年。)

AI: Whitehead, A.N., *Adventures of Ideas*, The Free Press, 1967. (『観念の冒険』山本誠作他訳, 松籟社, 1982年。)

Kraus: Kraus, Elizabeth M., *The Metaphysics of Experience: A Companion to Whitehead's Process and Reality*, Fordham University Press, 1998.

- 3) 現実的実質の生成過程の諸相における感受の理論は、有機体の哲学の根本をなす理論であり、「把握の理論」(The Theory of Prehension)として『過程と実在』第三部において非常に詳細な議論が展開される。ここでの説明は、あくまで意識の発生機序を簡潔に説明するために簡略化したものである。
- 4) 比較的感受には「物的目的」(physical purpose)があるものの、「物的目的」はその主体的形式に意識を含まないため、本稿では取り上げない。「物的目的」については、以下のように説明されている。

もう一つ別のタイプの比較的感受は「物的目的」と呼ばれる。この感受は、……概念的感受と、概念的感受がそこから派生するところの基本的な物的感受との統合から生じる。しかし、この統合は、同じ基本的な物的感受にもとづいて、「知覚的」と呼ばれる命題的感受の種を生み出すものよりも、もっと原始的 (primitive) なタイプの統合である。これらの物的目的の主体的形式は、「対向」(adversions)と「嫌忌」(aversions)である。物的目的の主体的形式は、これらの感受が意識的知覚あるいは直観的判断との統合を得ないならば、意識を含んでいない。[PR266]

たとえば、単細胞生物の何らかの刺激に対する反応、磁石におけるS極とN極との反応、陽イオンと陰イオンによるイオン反応などに見られるような、原始的なタイプの反応として、「対向」(adversions)と「嫌忌」(aversion)を解することができる。つまり、客体的与件にたいしてそこに向かっていくか

あるいは、それを避けるかという、単純な反応を生み出す感受の形式としての物的感受が理解される。

- 5) 事物における事や物としての概念的な分析以前の客体的対象のあり方を「モノ」と表現している。
- 6) 「それまでになかった述語的パターン」がなぜ生じるのかについて説明しておきたい。結合体のうちにおいて見出された永遠的客体をそのまま述語的パターンとして統合しているような命題は、不定の事実のうちに見出された永遠的客体をそのまま引き受けて形成されているため、述語的パターンが事実に対応する「順応的命題」(conformal proposition)と呼ばれる [PR186-187]。しかしながら、概念的感受によって得られる永遠的客体は、もとの現実的諸実質のうちに見出される永遠的客体にとどまらない。概念的感受の派生態によって、もとの概念的感受によって得られた永遠的客体とは異なる新しい永遠的客体を感じるのだ。そして、もとの結合体に見出された永遠的客体とは異なる永遠的客体が述語的パターンとして結びつけられる命題を「非順応的命題」(non-conformal proposition) という [PR187]。したがって、概念的感受の派生態について確認する必要がある。

たとえば、渋谷のスクランブル交差点に目を向けてみよう。多くの人々が行きかっているなか、それらの人たちのなかに「サラリーマン」や「OL」や「高校生」や「警察官」がいることをわれわれは認知する。このように、われわれは不定の人々のなかから、それらの人々の特徴や性質を見出している。これと同様に不定の事物のうちに、それを限定しうる質や形である永遠的客体を見出すことを「概念的評価」(conceptual valuation) と呼ぶ。この概念的評価には、さらに派生様態がある。それが「概念的転換」(conceptual reversion) である。概念的転換は概念的感受の二次的な発生であり、概念的評価において感受された永遠的客体を若干ずらして新しい永遠的客体を感じる作用をいう [PR26]。たとえば、「サラリーマン」や「OL」をわれわれは「勤め人」として見ることができるし、「高校生」は「学生」であり、「警察官」は「公務員」である。このように概念的評価によって得られた性質を少しずらし、新たな永遠的客体を感じる概念的感受の様態を概念的転換という。

以上のような概念的評価や概念的転換によって得られた永遠的客体を扱う重要なはたらきがさらにある。それは「変容」(transmutation) である。スクランブル交差点を行きかう人々について、概念的評価や概念的転換によってわれわれは諸々の性質を見出すことができるだろう。スクランブル交差点には、「サラリーマン」や「OL」や「高校生」や「警察官」がいる。それぞれ

の人々は、たしかに固有の性質を持っている。それらの性質は、男であったり、女であったり、大人や子ども、年齢や国籍や考え方や趣味嗜好も異なるだろう。しかし、われわれはそれらの性質を捨象して彼らを一つの群衆として見ることもできる。人々は「群衆」になり、「黒山」を作り、われわれはそのなかで「人波」にもまれる。このとき、われわれは、個々の人々の性質を捨てて、それらとは別の性質で人々をまとめてとらえている。このように個々の事物の細部を捨象し、それらに共通の性質をもって、一定の事物をまとめる作用をホワイトヘッドは「変容」という。

この変容によって、現実的実質は、諸々の性質が見出される結合体のうちに、同一の永遠的客体が見出された場合、その永遠的客体をそれらの結合体の性質として特徴づける。このとき変容は細部の差異を度外視し、全体にいきわたる同質的一様性をその結合体のうちで際立たせることになる [PR101]。

以上のような概念的転換や変容の作用によって、述語的感受はもとの永遠的客体とは異なった永遠的客体を得ることによって、それまでになかった述語的パターンが生じるといえる。

- 7) これらの例はホワイトヘッド自身が挙げる例である (cf.PR185, PR259)。
- 8) この点については、飯盛元章『連続と断絶 ホワイトヘッドの哲学』(人文書院、2020年、31-42頁)にて明解な解説が与えられている。
- 9) ホワイトヘッドによって「想像的感受は、表示的感受と物的認知が異なる一般的事例に属している。」[PR263]と述べられ、論理的な主語をなす生<sup>ナマ</sup>の与件と、そこから述語的パターンが派生する生<sup>ナマ</sup>の与件とが異なる場合があることが示唆されている。詳しくは、佐藤陽祐(2021)『日常の冒険 ホワイトヘッド、経験の宇宙へ』春風社、66-74頁を参照されたい。